狭衣下紐第一

此下ひもといふさぶろもの抄をあがらの橋乃
あたりよりまとよ洛げの物がたりを所のめ給へる中
にも第れあやまり給ひ給ひしを所まくことなり
あしかなりけるにあくをしるにべしとあるは
なほ古本を見るにんもことまもまと紀りたくて
ゆくり袈裟乃神垣ちり幾普賢堂の傍
庇りちかく給合て造営の次祢ちん縄乃和
の底り下紐と外題にお所双紙を見るに此神
乃あたへ給へ家と懐中してくりたりは抑
光源氏乃物語のんりん解なれば抄をとらぶが

九曜文庫

らず一条禅閤家祇などのりておそひ給ひぬるより講釋なども給ひなるべし 系圖は遁遙院殿おそびしきりつまくなれば給ひしに古語あらん人々は相あやまつ事紙あらんなめらへし

天正十八年初冬に書写の功をはりぬ 沙弥中醒

捜衣系圖

五十九字多寸一皇子

醍醐天皇 字

朱雀院 六十二

村上 六十二

冷泉院 六十三

花山院 六十五

三條院 六十七

小一條院 無詰即位

園融院 六十四

一條院 六十六

後朱雀院 六十九

後冷泉院 十

後朱雀 第一皇子

後一條院 六十八

第二皇子

一條院長徳之比源氏物語繼之寛弘長徳長保寛弘初也

顕光兼任右大將時右大臣

堀河殿此物語了見ゆ也園融院乃二の法子なり

家べし

師輔　右大臣九条殿　坊城殿

伊尹　謙徳公　一條院殿

兼通　大政大臣忠義公　堀川殿　今上　狭衣の大将也

境中納言　越前守　為時

此条式部　源氏物語　左衛門督佐　宣孝ニ嫁ス

大弐三位　狭衣作者

一此物語は源氏物語のものなり也夕霧の大将冷泉院などに似たり又花山法皇或ハ宇多御門ゆかりに王侍従とかなりし時狩し給ひきるに

賀茂の明神現じまひて明時の祭を志給ふ
ゆきよしかさせ給ふに我ハさやうのことしたり給
らずとかさせ給へばやうあるまてかやうて
あがらせ給ひ々家がいく明どちくしてあがり
もよらぬ法位ありつゝあまひ々まば寛平元年
十一月より御時の祭あり

一時代は ふ堀一条院寛弘此比源氏物語作者
里四十年ばかり後年源氏物語ハ出たらん
人は酒釋にもとよばざる也

一少年の事　此教云踏花同臈少年事にて
かきりか年とも其年此人也　是ハ花を踏

と云んなるべし
一中嶋の荻も　引　夜にこそ此歳かなれ荻
花松りとのことも有りひ々陰か那　古哥れて
とまじがりや
一ゐて乃まとり　引　其れ池やゐでの川　せにかくふ
らん岸の山吹そこともあるへり　源氏胡蝶巻の侍
一鳴童　同お
一源氏家　さ衣のいとこ　堀川大臣乃上ハ先ん帝れ
法つもうとや　秋家にてありしまし々りおりゐ
の後大臣れ此給へりさ衣乃法母也。中納言中将
ハ源氏家乃家女也

一そひふさせ　二人の家女へて
一其家　後一条院也
一荻の志なひ　級字也。くさくさしとよめり級照
や所思乃志也
一花こそ花れと　茶葉乃哥あるべし此詞にて
定都也　引　あるふより其の叢所山吹乃花ふる花
の中にり法ふれ
一くちなしにしも　引山吹の花多衣ぬしやかされ
とへどあるへむくちなしにして
一はるを　中納言答也
一いりにせん哥　大将乃法人我山吹りことへ給ひ

て独吟(どくぎん)也

一ふる川をさまゝに　引　吾みこもりせきもまにへ我な
遣やおもふ心の松てやみめる　此哥　身三巻つゝめ
あすも志なん人のあまるといふみと

一うきぬかきいらにふすまとんかるしきやのまて　草子(さうし)
の地なるへし

一むかし後れ別し後　引哥未勘なれまし

一侍るへきのまかり　おもひをおくらハさんもをなうひ
なきさにおくて二葉ふより　嬪妹兄弟(きやうだい)のごとくみ
てとりふれし南(なん)時まで　丈婦を妹背(いもせ)といへり

一大宮母文(もんや)あきともて読わかりし然さとも也

一いかなるもの　是より双紙地也　それまでなるへし

一おほ殿(とゞ)乃法性ハおん　此御事をやうへ中宮(ちうぐう)ときの御猶
あまたにふかき事の事

一故先帝(こせんだい)れいのと　さ衣の法母也

一洞院(とういん)　太政大臣(だいじやうだいじん)　後一条院法皇

一坊門(ぼうもん)　先帝(せんだい)の皇子(みこ)式部卿の宮乃女むすめ也

一今上(きんじやう)　法皇の院乃一の女君(によごよう)の也　坊門の上の法孫(まご)

一后中宮を　堀川殿の母宮のおほ宮乃法
新めきてえ給へる御腹り　さ衣のむまれ給ふ
事を出せり　男君(おとこぎみ)さへうし狭衣の也

一二位の中将　さ衣の南宮也　天道とおもひしめ

て納云ふもなし紛もぬとも
一第十六　三十塵點功首大通意揚仏とも　仏
ましく多係は仏いまぐ王位の時法子十六人
あつまり如道乃後仏而へ語して法事子と如給ぬ
入滅の後十六人菩薩達成生後利益して
十方にして佛に成給へり第十六教めの法
子に列しの婆婆世界にして如是をとなへ給へ
つまり列と日の釋迦如来也
一おほふだられ　引大宝におほふだらの被を
が那　長ちる花後風にまろせじ
一は世をハかつまそめにおほしめして法道心あるべ

世にあつまと所る人をばおほしめしかまぬやうも
ちる程に世上人抱きさまじくおほふと双紙に書
一かぐと　そとだから也
一引　おほ乃夜のちよ後一夜りなせりとも何ぞりく
多也　偈なん　綱中也
一引　志かみてだ入ぬるいそれ草なるまやみくまくなく
しかくくのおほ夜
一いなぶち　引年をふ係なみぐうにあふ事を
なる後いなぶちの滋まされとも　大和乃名和也
さ夜乃あ風にくまり　ん後はくしまふとも　北云挟
夜れ朽ふし　春法法ふ而れ人の心なるべきも

一聖教なつかしき引 其の聖にまゐれはまゐらせ
我で聖教なりけるを一聖拾りける
一梵網經 梵網經二巻 花嚴經乃結經也 一見旅女
人 祇失眼 功德 花嚴經文 二尊院にて 因正月廿
九日は尋るに梵網經にはなき今よみ侍梵網經ハ
下巻也又尋されたる上巻ハ 又見ゆるに
一翠ハ時なるぬ 雲雲 浮ゆ お偽あらでハ罰ゞあ
ゝ侍とゝ也
一あ幼わらゝこ 浮浪日本紀下巻第一 天雅
一源氏文 先帝ハ圓融院 内親王 法母ハ中納言 さ衣と法いとゝ
さ衣の法母 元ハ母文 の法めいも

中將乃同じごとに さ衣の中將とおなしごとく
ゆゑぐゝ給へるとも也
よしかゝ侍
いたづの 殘藥 引をたゝれいたづ乃ちしれ
あまじ 是さよりゆゑんまふ紀をて 源氏の文れ
るまにはあらぬ 藥 紙なるもあ侍りとういまゐん
めさるゝ也
一をとなしの まひ 絶てひとりふせ屋りよ
まゞしおつるなゝごやをとなし乃左衛 紀州名
清原元輔 奇 引をとなし乃河とそはなにあが
まゐるいまてものおりふ人のなゝこ 此奇叶へり

又引いつかしていつにようくんをの山乃上よりおつる
青あしの花身　是ハ城別
一志のふすぢぞ望　毎ごみぶれたるにてとなし
思ふなるべし
一大おとゞ　大政大臣の法むまめ　今姫君聞しなひ
給て後一条院へまいらせんとし給ひ
洞院の上ハ堀川のおとゞ此れ方
一其文ハ後一条院　内と中ハ一条院也
一中将の兼内ようまうん出給ふみちり　菖蒲ハ
まさげぬ賤乃おハ為紀とも也
一十帝の里　刊帝来歳八重の法称まを定只太正と云也
十帝ハ別ふんなし

一うかなども　菖蒲おりく持てくわが如かりも見えて
ぬとも也　隠身りまくめられてりしこまりたるもい
たくをひ追ひ拂ひそと法剣禁也
一ならひにて出ぶらへも　隠身答中詞也
一おひのみちをば　くるし夷ならひと大将法身
を捕えておかせらるゝ詞也
一あふぎ絵　あふぎにてふくるす倍にする也
うぎぶえ源氏にあり口にてうき絵ふくをもし
一まじとも　牛蒲　源氏ゆふがれのまゝ紀に似たり
一おまづ　女房ごとも隠身が身にてぶたと大将法
くる海のまゝぐる絵あるべしとふんも

一 軒のあやめ一ぱち　引落てをくれる語勢ありを
ひ付くなるなり也
一 志らぬまの　白沼氏　志らけるまとうけらる袂
白沼まゝ勘志らぬ波なるとのん袂ニのかくれなし
一 心とき　利根なる語勢　祝求出たる也
一 ゑんかえ　源氏にも此詞あり。うたうれ源氏
まなし　葉の文字也　俗に大和絵名と云也
一 みもわかでの奇　軒のあやめもみくぬがうり
葺しゆへとも
一 うちつ事げさうなどハまざと法心すいてぞ
あるまじき　あやまくに源氏の宮なるどに

法心とぞめ給へり
一 久まさぶへ　紙乃まさぶへよ給ともめつらしき詞也
一 法哥とも　草子の作者の早下し
一 左大将の女御　後一条俗　南去ゑしさ衣に悪
びて逢給へりそふはあやめと奇にあそびそり
一 まひまゝ法哥　今日ハ祝さへと根を兼て
一 一條院乃ひめこや　三巻ありさ衣へ来給へり四
巻ありさせ給へり
一 ほのうちりしかぞ　よくもれ定給まぬとしかね
のうへ乃文乃中に　源氏わかむらさ給への法文か
納云への法文乃中にとあるあるもの也

一おりひ法ゝ奇　ことなるなるなし
一おかし　筆志もしほとも
一下子ゝりく法むまてうそぎたる　事そぞたる
んなるべし
一をとたの山りはなると　引奇あるべし
一うまのゝまつむ奇　志げむ勇者中く　書ね
もなかれぬとも根も流ぬやうにを淤泥のん
なるべし
一そのゆふさり　五日は法茶内と志召まめきれる所
とも　宣せん　雜度うでんへの法んぎしまも
一父公へ　そふまてまぐ見えまいらせげりしも

一中宮の法ゝに　さ夜乃法姉也　法母或ゆ心法
むまとめ　湯門の上也　法まづらひんもとなく　志召
り法引風とてまいり給ひ　又大臣も法胞と
也　明日法喜生ありてまいらんとも　異法法退
おあれと志召せども法聽出ぐこうらんとも
一何しかり　異法めさるゝがくるしきと二所し
て法ぶやき給也
一うちも　園し
一さうかん　ふ知
一あせんまう　浮線綾
一内りは　菅倉なるとおらぬ面中　此法さびし

さちゆるべし

一大相とく　南宮稽中納言田巻に一の大納言一和
文をんよりまて中納言の恵りくらひてぬ
まさぬ云出給ひし人まゝ文乃大夫也　私は義誤し　弟宮
一左兵衛中納言法弟　宰相中将は左大将
法子也　宣耀殿法まゝ殺也
一源中将　さ家也
一おとひのえんには　合奏なりして独くとの
勅定也
一中務文
　　少将　笙の笛ふき給ふも
　　姫君　弘徽殿にて大将立学の役へ姫文の法なりにて
　　天雅法子はありき海繪に手給ひしとてなくなし

一中にも　さ家はふまゝふれにも横笛はまゝひ給ハ
ぬまゝ独くはいりぐとも也
一おとひ　こうひちゞめて明給へと勅定也
一いとうぢうめの　めぢ勅定をそむかまんとは思召
まぬとも大臣にもをとらぬ思召なるにけつとさ
へ兵法同心は曲るすとなりせらるゝにまゝ
てうと笛とゆゝ給へる也
一こと人くも　さ家の四文裁め程もなき身にて
琴なぞ中りくとなりまして皆のうちりさ
家へ琴をとゝまされそれぞ笛ぬさへんでもさに
との勅定也

一うつとしたらましかは　中将の心ふえたるぞ法師皇
ちらはじまいるまじ夷りの紙とてわざとうゐく
しく明るしまふ也
一うへは　おりしろさとおぼ給ふ雪人くを
給ふぬおがしめせたる大臣のをしへをこゝぬかれ
すうく汁とてさのこゝふさ給ひぬ也
一いとうとて　虚気をありくしく中ゐるも
大臣の節にまさりたる紙明ぐるしくおもひれ
ぞ給ふまじとの勅云也
一皇太后宮　さがれゐん皇太后宮は先帝乃法
妹也

一おとこの　いぬくしくおがさんは中将乃心　法師
は天子なるべし
一雲のまとこそ　ぬ蟻のすまひあるぞ也
一いなびま　雷電せんとおとへだ青朱雲まき
こゆる也
一あさこ　俗ありあさむといへり源氏にもある詞也
一いなづまの舞　さ家の舞も雲の材わたるとて
合奏あらんとのんなるべし
一いとゆふ　日ゆかりいとなど乱しとる御也
一我も　さ家もはそはまんとんがそく思召也
一うなしく　さ家の此世紙いとりしくさおがしめ

せきは法門又又母の法心後おぼしてまいるまじきよし此詞を給給ふも

一雲のまし　雲輿（くものこし）　可ゝ詞

一あやうく　法門乃法心とは世りさ衣のんとゞめざらん事を思召也

一一天皇　秋院

一此宮をば　女一天皇も法門母后（ちゝぎさき）も丸（とうさけ）なかるしひ給やあめわり法子此下し我乃勇の代（しろ）にと天子れさ衣へと思召を源氏の天子ほん深給ひてうまひき給ひて弘徽殿（こきでん）乃ゆまこれ我見ませてさ衣悪びよりあ天皇をうこ給法母我勇（ゆう）りおさせ給ひて

奏しまふ此法歎（ちけき）り法誕生（たんしやう）の七月めに母后ふられまふ後ろまるまにおりして法病（やまひ）りとつまて法ぐしおりし給也

一后もまのうや　女二天皇も此天後さ衣りまいらせられて天上の御ぐしにとおりしめまも

一大殿には　ゆり川殿りはさ衣乃退出（たいしゆつ）を給うほまへるに伊豫（いよのかみ）に女て天雅（あめみやこ）に此下給へる事をやすをさうせ給へるし

一ゐ給へらん　天上とやまく給後ざり見んと思召法心の中を母天おぼらさ給へる也

一世はいふ

一ちく海川　引弄未勘　あり川屋禁中への屋を
うらに此法源乃る事歟
一屋いの法ふく　此おこう呉なる也　壁の法ゝるべし
一中将　大臣乃法迷り屋上の屋まで出給へる也
一ためらひて　源り　咽まへる紙か思慮ありて法
おへ来給ひて　何るもいひをしゆかし　面とぐ
の間も本尤乃外　琴笛ゝるとハもしへ給ひ
一あまたふれまてを　さくりとてふハむりかしくふ
主ふもまひだしとおりひしとも
一いりふ又　只法一男とも
一ほしくあんおりふ給へて　美女ありいて

一中将　しとしも或法挺よくてびき給へるなるべし
一みのしろも　夫のた衣に代り女二宮をまいらせん
との法門乃法寄也
一法まやと女二宮に法るすと推量ちがら武蔵
乃ゆかり源氏の気なりしたとも　おりひぐ海ちまんち
おりしかしこまりまして
一むしさ紀の　狭衣の寄しさ衣乃ふ　源氏気なり
たとの心紙何とも天子ハはえん給さき給ひ
むさしのくむかひのをかに草ちまば根をたづ
てもありんとぞおりふ　小町何も法ゆかりも
一ふりいくたち　草子の地と

一二文字　女とのはんなり
一なく一ふ　引夏の夜乃外とまれだ時鳥鳴一ふ
り明るまの先
一毎文いりにまうし　国　せめはめらるゝさびれるゝ
霧　日源氏明石書りあり
一はてげから　はぶ　はなどさりまうなひ給へど・ゆまう
ふ用也用ひ給ひめる
わづはまへとあれと毋文とじめ給へるや
一木幡の僧都三年寺乃来寺名ハ不知也
一きいし。志きじ　家司　織書しなるべし
一はいのりれさ返いとこちたげよ　しとしく思召

を安てはうまゝじきハ源氏文ゆへ月紙いりどとさ夜
の歌なるや
一うへのいとし夜　女二文ハんにはかれ　源氏文おさ
ま紀時よりまなれ給へるおもりぎよすまぐらく
て此身乃代きうゝ事なくとなくて此源氏
文なるぞかや
一文くり奇　狭衣　先ようさ衣と影す　笠
り此身の代きうされ給ひしとや
一稱ぬり　引夏の夜を稱ぬり明ぬといひをきし
人ハ抽をやおとはさりけん
一山さハ　蓑のるすや　薦雲巻りあり　南時ハ心も

とのゝうへは用也
一花ぞしまれ　引歌 さきまさる紀のまくら旅なる郭公
ちる名たちもどらるにやどハかりなん
一秋のむすらう　さ衣哥也 時名乃ごとくちてくれを
世にうえ人のあるまじと也
一弥勒菩薩の金山　蔵甚微妙　法花宣示 称名法
花を摘りんとての詠二白毫おもひ出て東方
八千の世界をてらし給へる時より東方此国土の
仏此身おもひやりきさこゆ給へる文也
あまりあそつおつまさ偏ゟ　又兜率天のむらくへは
ようおどうらしもと心まりしくと云也

一みほの釣
一名をまひある　極楽の法を説るなるや　三笠山とおり
古き達磨は人の中くにしひあろきる　秋なみ嶽哀ひ
かる此帰をもすり胸火の火のごとくまさしみたをのまんと
されだ恐らる火のめて消るゆへり名吉さなきし
一秋流　さるの情ず一源氏之の法にとる也
一宰相中将　此月花不見　伊勢物語のるちるべし
女一宮と白まるゝのるす源氏宇治巻ク似ら
正体あり
一我もうり　狭衣哥也　家八嶋の煙をむろしうり
縁ずてもうし　さ衣も年経て源氏の名はすのび

あふくへし也
一 思ひより引うしの川思ひより紙しかものを
こたへありそで左ひたるあとを
一 かまへぬ心より 引奇来勘
一 天地も さ衣の法 飯のからんと自己で立給
也
一 法るへ妻人く 春秋乃法 おやあしめ事を
おかしめすや也
一 流れとる所 めのとちゝまき衣法んを受
やうや
一 ありてうき世 引奇来勘

一 又も御門のさ衣を牛車にて退出の殿上人
とも候と御物也
一 源氏の大臣乃御事 左大へまいし也ぬと根源
中つら也
一 大臣 當世へうち也 京畿お遠飯
一 何か人の 名大臣庭先むらさきよ云し孫さんも
いと紙しもさ衣へ又物とらぬ乃法後会也
一 常盤井乃ことうし はおりまいらへとこふおか
らさ衣しきの婦さかるも
一 権中納言
太政大臣 ― 一条院の家流

東院上

老太臣今ハ指中納言春宮大夫兼官也

一大の母ゝ女ハ秘せらんむすめ　此法方源氏文
りハをとらんやとや

一みげがらくゆる　ち海孫まとおまげ王孫我今
非君自悔我

一たかぐら　鼻たるやさ衣ぶりとう口男人に推
量しまがたぬと云ふ也

一ほくえまれ　さ衣の親父をおとぐ法らんとて
家かりし時乃る事給出さるくや也之ちの女の
殺也

一右院の　別事ハ法懐愍ちがら姫女のうこハ
うくハ別禁なれどうしてく身我ぬすを出て
見しんなりしかど三人の上をしきられてやを
しとむかしがたりやおとぐの今ハ人三人也

一ひとりあるは　別姫女の聖へうろぐしさる
出来とや

一所の法をし事　笛ハ録り女二宮のるも

一うちくおを　女二の文の法るまあるさうり給
られらんとや

一あなむ何かし　さ衣のんも中くなめげなし
んとひのがれ給ふちらべし

一ふりいらぬから　おとぐれ心　ゑちまちうりこそ
大臣の詞也
一まつらりしくて　ひがくはしろべきとのきしき
を見て立給也
一ほうさ殿ゟ　狭衣斎也源氏ゟをまして余不
へもん殿ゟつきじとも
一年をふ御源かいふおふるすは狂いな渕乃濤ま
されとや
一母文　さ衣のまいり給へも悪氣なや屋せ給へ
家と母文の法詞也
一屋のさぼうり　母上のわかくもぐれ給へるも

一夜やせは　さ衣の法詞うくへまでじ夜風にまたこがひ
てもしまるくなるんも思ふすかりとも
一わたし雪　東勘
一めづらしかしん　さく文の女房宿のるも
一中勢　引　東路乃乃まてまる常陰帯此加
ことをうりはおもんとぞおりふ　そとぞうりは恨
をうまんとやいふにそや弱り床し夜とさ衣
の法詞にて見わたし給へるも
一屋の　おり川屋の女二文へほのめかし給へとあれ
どもさ文　さ衣の法母　先輩法妹　たしゑまくおりしめれとも
一ゑぐさたうり　女二を男の代にとおつきしをめん

ぶくにてあらん天子にもおはれとやおぼしめ
さんかとも
一かずならぬ　まれくしまるすまのまて陰乃に
禁れ数ならぬを勘出だやさも
一はらさは又いく世もあるまじからんとかくの
給ふ後母上れは親王をかりてゆかれにもゆく
し表るすなの給ふそと給らるを
ものうく　女二宮を抱うくおぼしめさは志あて
まいらせ給はんやぱまして母宮のまゝまゐ給ふ
あるまじきるすかとも
一日三位　母宮の法にりたりはぐ危也　居去一日

場門乃上れは兄弟のかはまゝ筆の言れ
めでたさに女二宮乃さうりおりしくまし後
まゝ後行来のくまのりしくにゆづらんと天子れ
の給へるゆゑうらまし也かくじ事なく安るを
されんもいかゞとも
一かくこそり　めでおしらぞいかゞおとてさ衣の立給へるを
一書ぬまは　内へまいり給へるはあてりおやめ
乃前よめる和後勘給へぞ見ん盃し陰男かと
ちつ当家にてくまむまとめ八中務宮のかれ乃
法先のとも大納言辰の丞舞しと二巻すし
おるも此物語を塙乃るすを先ん出筆方可

見ゆる也

一中宮　播川殿乃法むさとめ表宮乃法母。坊門上がちは殿も御まします也

一御前表御とぐ　洞院上中此第一といふ所也本指き根本の心也　引　殿上ゆるかしふ所乃りと指りとの心はまさまられなくてり此所は同心也おありかふて又わらくかなる人ざ處とも云ふ

和字也源氏むかづらを云ふ

一かくさ處へ　表宮なると殘りてお川かゝるを云ふやゝ給へり

一中將　さ衣を源氏の宮のかしめに成給へる時乃

御もかげもさぐりてり似たるりやと思ひありきし給へと似たるもなきにあらぐきあらぐ給へるを

引　日がむなぐ法めかしの川更科やをまぐ様にりてる月を見てのふなるべし

一表宮より　さ衣まいり給也

一入ぬる殿　東宮の法詞也　引　志ゆみてハ入ぬる殿の榮なるまやみくすくあらくまゆくの御前表

一みぐりふち　さ衣詞也暑氣によりまいり給ひぬよしや給ふ也

一なにふち　表宮の法詞也物おりひなく少ゆくこてなくやきれよと也

一これはらんせゝの　抱おもひりは得ゝぞ只風のまき
ゝるとかいふ幾みを給へり
一源氏の文　まこゝ文乃はんや　あるべし
一あるずゝ　右物がゝりあるべし　未勘大かゝさは抱
かゝりにて　不知
一人のさふまで　引志のぶれど多り出にかり　我
志をものやおもふと人のさふまで
一はゝぬ　中ぎゝの物がゝりまあるべしありがゝ
き志乃出りはまゝひ得ゝし也
いかりの志のしちれ志ぎられをへとへぬる人は
ゆゝん

一ことぎゝなる事をしきや志るかるまゝん　さ衣のこと
ぎゝなるかし事を給らんじていでおるやうあ
らんとの給ふも給ふんなるひとて
一わるむ　狭衣哥也かゝられなし
一海ことなるぬ法まゝ技とも　源氏文は法見事のやう
にはあまことをもふらも
一せんようてん　さ衣の志のぶるすかひあるまゝじ
とて法退おも
一二条十八文　仁和寺の威儀師うげまさに乾鳥井の
志の法と鳥口鶴を乳母とうゝひてぬすまてゐ
りあひ給へりおく奥にてよく咲ゆるゝ

一 ゆうしら 法師と魚頭と事やさ衣の法車を
見たるや
一 わらはべ 供の童僧具を持たるべし
一 ぐやく 源氏物語にあづまくなどの物云難
一 志げしをしさぐめて さぐ先ばして車乳高
舟やとさぐもるも
一 母上まで 乾鳥升君後云素のある尼君
かたんといふ
一 法師たしつ里 かれ後にして威儀師にくるや
牛飼をさらへて取るに私のぢちにて見付ら
とありのまゝ事也 こゝでさく車やれと威儀師

君後ぬすゝえて牛飼はいそぎといふゆへ見付
らまてくるとや
一 師ハ志こうへ 師近よハ志こうふと云法文をさて
こる者車を急こるとや 山海よりハ志こうえ
しとをそれこる事ゆるせるゆへも
一 君ハ志かく ありさ海を中にはしは剣ぢる
にあらぬ事なれるゆとおかせら歌也
一 うのさらかに 者うとうんをにけてもりこも
志らばおくれとりは法師かられてゐてはまに
おんと云て法續松もまいしぬ事くしそれぞ
車まいれとや

一めきまれたらんハ　さ衣の法詞也　夏のふりをあ
らぬるすゑらハ俺しからんふらきなきに雨とハ
んをは師あきれとくにはれてゆかんさなく
ハおよひかくてあらんハいりくと思ひ也　屋へちんこ
よひハつまそや論らんとも威徳師かけさかづ
きそにぎてるさ姿ぎこにてたゞ中ゑもやふま
つらんおらも
一あすか升り　こゝひ抽く　龍鳥升に屋とりハきべ
しかゝもよしみもひもさむし　みま法秣草りはし
やとりせよおともつくゞとおとにあがら車へ乗う
つり給へるも

一いとあふく　龍鳥升乃元れ秘也　あるいと法
しさ衣の法詞也
一引り給こしれよしのふりありるともとくまんと
おりふ秘なしあくに、うちまてくんうくにげた
屋とあるも
一あり法るしらつ夏も　丸おとそ尺なつれ
おらも
一な紙はいも　法師とんあつきしまつるなら
ハさ衣の論り給りんとのまふ法殺　さだかりハさ衣
とおぼえあがら文雅ありとしけれバ
さぬに又まてくおもせば法師きてはまく

ゆかんとおもひてありのくわがころもかさんとやさん
めとおりひあすずくゝるおくりてきし妻さ衣を
おもひかるよりかゝでありしぬ人乃さ衣をあまたぱく
あらし奴経と
一法しむべうへうん　法然の身と中まうれしと経
しさにおうんとや
一経の法妻のふ　ん見ゆり法師を遁るべし
との経にて
一ねりしめへ妻　さ衣のあそてゝとさして折り経ん
が侘しきとや
一おり川といふくなゝ　飛鳥井　其次閉ざてい

うゑとつかうりさ衣の法んや　あひかり天下あり
きてつるかと云者ちひいつとらすとげてありてる見
梅さりしぬべ妻人まつやと申はすなく法然まをて
をちらんとおもひつれど知やもと妻黒き名きるれど
車よりあはに経めて　藤川へさ衣をいへ経へり
一きそいつづいかへきとさ衣乃向のを飛鳥井は
其遊よりかのるりあけまさりまえとしあそはさ衣
れおりかせらるとや
一つ倫そ　宿の人乃閉し梅やをあけされども　蚊
遣火の煙さる状さ衣の法然してて法寺を
一我人つねてや　狭衣寺や　おりひの兎りみちる

家とせりくさるをぬハ姫君に法やとまうやうし

一 挑あひし　能書升是のんし法師乃見えしと
てあら纔かし入ぬるときさ衣をあざやかしく出るべく
なるべし

一 大輔の君　むかへの車まそへさるべちるべし

一 ねさんちに　さ衣乃詞也

一 うちをそそきれ　うちさくくと云心也

一 あ風しう　さ衣乃ゆん中也ゆるし我宿世なりとも

一 いそや　法師よりまあれつくんとおりしめすも

一 あり法る　ありしおもひおもし給へるなとも

一 とあるまじきとも　能書升是舜も左の志るべうまし

とありそれを　之悔れとハの給ひあまりしとある詞

也詠也　能書升乃謡物をとらりてみまくさもよ

りしとやきさん而弖ふくりさのしやも早下さるべし

くるをそめ此やどりやらも

一 その状ちをも　絵もうしのんなめり

一 あまてらぬすり　徒衣舜もしらげりんさくしてやまさるまじ

流様ぐれハ法師かされ恭てさがあやせんとも

一 車まいりなど　人りわんせそでさ此のへとの詞也

さて車よりおりさせ給へるとし

一 牛車　二条よりさまらく歯りわりと也

一 家の人々　お風しぐる程どに牛車まいりくる

なるべし

一ものきこなく　法師にふきよくなれども八狹衣れ
常狹と云也

一うはていうしう　源氏云なるとなるべし

一あのをんなハ　例の系畳を今うまり　帥中納
云の婚今姫君といはるゝ也

一主計頭　うそへのうこがめにくるしか法あるゆ
をおもひて仁和寺の法師にあづきけるに法師か
なけるまゝ付ても

一車なども　威儀師かりけるゆゑより也今相元
をおしけるも也

一ありつゝ半かひ　めのとれもとに書て二条まで此ゆ
くりあれども狹衣を推なくん姫君いうにな
どいひくるかどに狹衣を遊ひ給ひしも

一ことは　威儀師ハ無為也めのと人やりそれと返
こすもせぬも　おもひなげくも先のとのたちなべ

一あの人　いきしがる也とは尚なるひさるへを
なし源氏ノ文内まいりに人易給ふまいり給
へ乳母ハいげちへもまゐらんとや也さ衣ハ推ゆてあれ
しますぞ姫君ハ知給ちんとや也

一志ろは　ふ事の法勇上と泣まへバめのともさはが
おなきてある人一日法門をそくあけられた

換非違使(けびゐし)外(のげ) 歯息(たうそく)お将と禄衣の名残傍路
ひくらも内大将(ゑへ)外が外歯とて左代 法曾代也
外歯度子をあふげるり門(えん)役(や)りとして あき
させんといふや けるかどにまれくまいる女な
どをおぢて海いくまぞとも
一 年おひく 乳母の祠し 我(われ)去年 去ぬ(こい)おげまへ
さぞふへやつまそてゆんで 美残雅あり見南げ
らんかゝも
一 うち泣(なき)く 姫君ハなづくへあり上ためのとなりける
さんとも
一 海ことり去る人を 奥列(あふしう)の将軍(しやうぐん)れめふ咖てぐ

一 ゐべし君子利 歯度汝子れおおね度へかうくひ路
へとも
一 あるは 気らりさ家の法ん心も 姫君りをとる人
をも見んあれ路りだけるのめでたしと八おおげめ
さくせんかりくらぬひさるく物ともをし考
まで思召をも密秘(かいきよ)とも
一 まうく 飛鳥井(あすか)君ふ海るく程みのくちく
海ぞれて 逸路(くひ)と
一 法とも乃人 吉祥天女(きちじやうてんによ) 源氏和定(ちかさだ)よ吉祥
天女をまふりせりさるをあうく 法氣付(つき)くすく
てめゐとこくもの乞ちれやとりあかゝいへり

一うつほかどに 難波へ下るべきよし光源氏おもひてとも
いかゞ文奥しまらんもいかゞ也 かたぶ度ひ給
へどもおぼつかなきと云称も 何として世をいとは
しほりんと流るべし
一志だしのほどならに 明石の詞也 我身をうし
なひてうく下給へとや
一ゆくへはづでさちあらぬべきにそ 又かた度のん源
之残りしそて給ふべきこともいかゞ文あさましき
今日奥しして此下をあるましきるの也いかに
もことわりなし
一うはいくら 明石のふなり

一されとぶに さ夜のぬれなくしゆへ浅きちらきりと
てみちのくへ下るのもものそえさまあなましく 挑
夜もなかうしあさき残おぼ川なる心おもと心と
源くむの世れもなりぬ 契りをついひあかさむ
給ふ也 引 立なるまじのようす源あるかにさに世残
源くをあまのるみちあれえや宮ともものぶめれ 源氏
夕つかのまこすりおかの
一源氏の友ある給 左大中将乃古絵宗し
てほの先りし給へる好友なり 引 浦めさまはい
まかりさおもの あふさあるの残源くしてとも
きんとうおりの

一人めしそ　源氏家を出る中将乃時乃やうなるうきなすを取ふもきうじとおぼしめすも

一嵩まの水れ　引奇未勘　清ふくと申しまゐべき人乃なれ也

一大家　さ衣の母家と碁うちせ給へる時なし

一きんぞう　能禮　おしたなると　源氏抄弄花

りあり倍まりしさんのんと

一子の衆を一衆　家の法ちハ　引奇　杖の衆風の衆を一度りあきりとも　ことぞ終りて多や侍なん

あそしへて八子衆しとハ久しくといたんこゝあるぞし　猶たやおく時のおくんとハ能当杵と

源氏家と出合ひしゆるゝ也

一さて海ぎらりしう　はてゝ何かこの法ちを勝

さ又いりぐなどとひ給へど碁れおくへハなくて

母うへ乃さ衣を見付給ひしくハ一切別の事ハ

出合ぬも　源氏宮ハ法西答なし　母うへとさく

中ゝ給ハで内よりさ衣をよべ度く　見るまへ

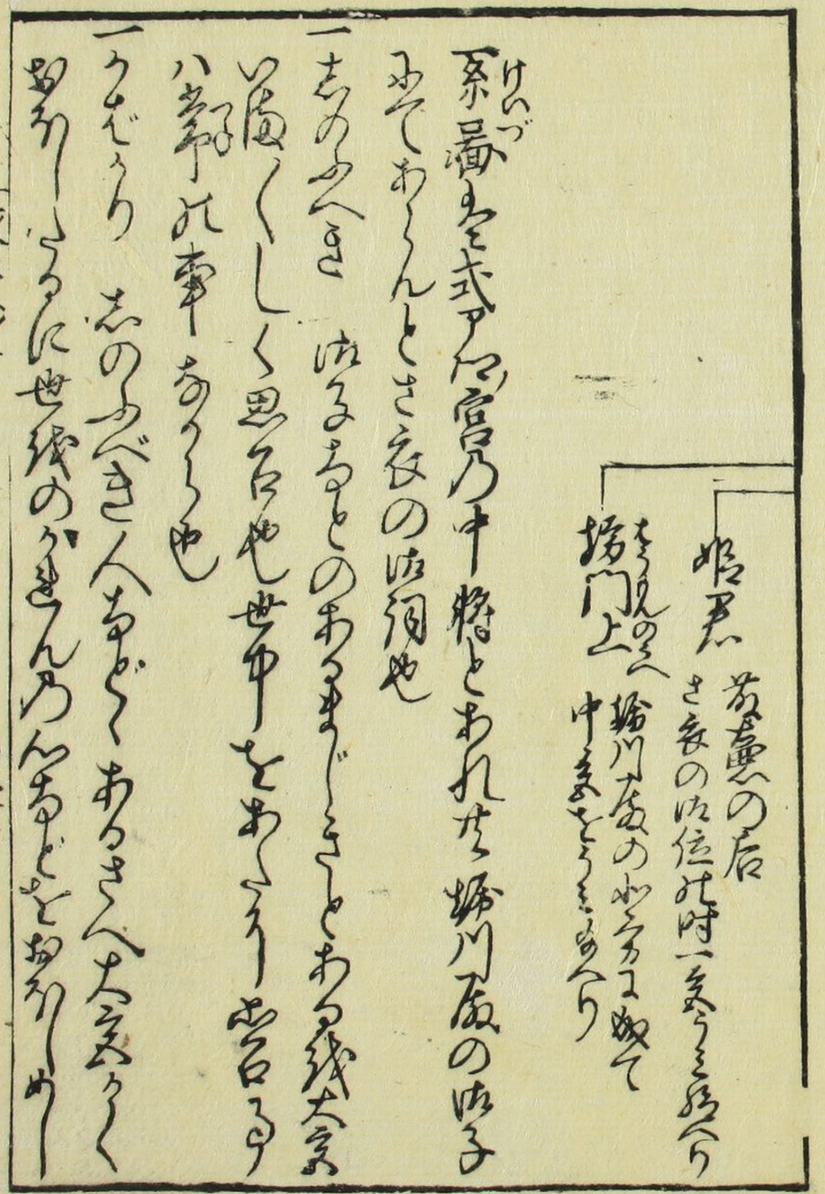
内との詞也

一なり給ひ　侍従の内侍二家の人と二家へ法文など

海いらせ給ハぬたひがくしきとむ所なりなから

母家ハさ衣のまゝとおぼしめ給ひ

一その法いらへ　二家のるすハ何とも御ぬせ是ハ



系圖 神武の后 媛蹈鞴五十鈴姫命 綏靖の后 渟名底仲媛命 安寧の后 阿久斗比賣 懿徳の后 天豐津媛命 孝昭の后 世襲足媛命 孝安の后 押媛命 孝霊の后 細媛命 孝元の后 伊迦賀色許賣命 開化の后 竹野媛 崇神の后 御間城姫 垂仁の后 日葉酢媛命 景行の后 播磨稲日大郎姫 成務の后 八坂入媛命 仲哀の后 息長帯比賣命 應神の后 仲姫命 仁徳の后 磐之媛命 履中の后 幡梭皇女 反正の后 弟姫 允恭の后 忍坂大中姫命 安康の后 中蒂姫命 雄略の后 草香幡梭姫皇女 清寧の后 難波小野王 顯宗の后 荑媛 仁賢の后 春日大娘皇女 武烈の后 小泊瀬稚鷦鷯尊 繼體の后 手白香皇女 安閑の后 春日山田皇女 宣化の后 橘仲皇女 欽明の后 石姫皇女 敏達の后 推古天皇 用明の后 穴穂部間人皇女 崇峻の后 小姉君 推古の后 竹田皇子 舒明の后 寶皇女 皇極の后 天智の后 倭姫王 弘文の后 天武の后 持統天皇 文武の后 藤原宮子 元明の后 元正の后 聖武の后 光明皇后 孝謙の后 淳仁の后 稱徳の后 光仁の后 井上内親王 桓武の后 藤原乙牟漏 平城の后 藤原薬子 嵯峨の后 橘嘉智子 淳和の后 正子内親王 仁明の后 藤原順子 文徳の后 藤原明子 清和の后 藤原高子 陽成の后 藤原温子 光孝の后 班子女王 宇多の后 藤原胤子 醍醐の后 藤原穏子 朱雀の后 藤原慶子 村上の后 藤原安子 冷泉の后 藤原懐子 圓融の后 藤原詮子 花山の后 藤原忯子 一條の后 藤原定子 三條の后 藤原娍子 後一條の后 藤原威子 後朱雀の后 藤原嫄子 後冷泉の后 藤原寛子 後三條の后 藤原茂子 白河の后 藤原賢子 堀河の后 藤原苡子 鳥羽の后 藤原璋子 崇徳の后 藤原聖子 近衛の后 藤原呈子 後白河の后 藤原忻子 二條の后 藤原育子 六條の后 藤原長子 高倉の后 平徳子 安徳の后 平盛子 後鳥羽の后 藤原重子 土御門の后 源通子 順徳の后 藤原立子 仲恭の后 藤原九条女 後堀河の后 藤原竴子 四條の后 藤原陳子 後嵯峨の后 藤原姞子 後深草の后 藤原佶子 龜山の后 藤原悦子 後宇多の后 藤原昭子 伏見の后 藤原鏱子 後二條の后 藤原西華門院 花園の后 藤原季子 後醍醐の后 藤原禧子 光明の后 藤原寧子 崇光の后 藤原秀子 後光嚴の后 藤原仁子 後圓融の后 藤原幸子 後小松の后 藤原光子 稱光の后 藤原信子 後花園の后 藤原朝子 後土御門の后 藤原藤子 後柏原の后 藤原慶子 後奈良の后 藤原晴子 正親町の后 藤原仁子 後陽成の后 藤原前子 後水尾の后 藤原和子 明正の后 後光明の后 後西の后 靈元の后 東山の后 中御門の后 櫻町の后 桃園の后 後桃園の后 光格の后 藤原欣子 仁孝の后 藤原祺子 孝明の后 藤原夙子 明治の后 藤原美子 大正の后 今上の后

てなぐさんと給へるも

一こゝろそく哥　さ衣ゝをおもひなり

一蟬鳴黄葉漢宮秋　朗詠題蟬。許渾作也

漢武帝崩して荒れ蟬ハ蒿れぐとく啼とも

一さばかりからハ　菊ゝかりかんるんと　おもきゑび

まもはぬ紙しの地と

一日の暮れも　引りく菊れ花のひもとく杖の乃る

おもひあまきまんへなちがめう

我さにもと　孫りさそゝまぬ事ともどうしく

おりしめほやこゝろ哥れ首尾なるべし

一かのほとなれ　鶴鳥杵の小家をおりし然しい

づるハ大くさなるぬおがくなるべし

一おりして　風がてあまとか杵乃宿へや

一こぢらましかハ　引哥未勘

一ひるの　源氏家とおもひくらべ給へり思ふるかハ

ぐれとハ源氏家のうちや鶴鳥杵恵世のおぼし

とやなるんとおりしめほや

一涙のり給ふ紙いぐんほらんとおもなぎうしげなる

がいふくあまきまにおりしめすと奥列へ下べき

法なるゆへなるべし

一久しう　物あまれなる紙法語にして世紙のぐ遣

んと世日まく例の人乃仏事しなるぬを見初て

うらぶんまでてんとさらにおがさまぬとも

一さらハ　引あらでこそ思ひん中ハまもなれなめて
我ぶふ後の志まぐるんり　古今

一あふりハ　引ふにハ思ぶることぞまもまけるあふり
うへバ法もあらぬあれ

一あれハ為我　さ衣みてあらんとも我ゆ身すあ
ひぐとも

一うりのまゝせ　引寄事動

一寄　花がりに　うくみるぶにふ細おり　陸奥の國へ下
らぬあさゝれ沼の水れなしなんとも

一寄　年ぬとともみちのくへ下るすハ志り給ひぐ譲せ

斗山の給へり　さ衣寄し

一うくいと　さ衣の法詞しる我さるすハ志らぬ
ぐりなんより外れふ亀のさりあるまたさ衣乃
法ハかまらじとも　いとうしくハ飛鳥井君の
心中　うくちんとハくぶらす我ゆのめうさぞや也
おとへたくぐしまことあるしぐとおもひとう
うくハ法よきんちがら譲ましきんとおもひ給
まんとせきやなうくなり

一君を　さ衣ハうぐ石家もし給ひぬをゆのこぐこ
きとおもふかとおりしめして　引もしたれとうへ
家山の志ゐ志まの義うへハまてとも君は音ぐ

とうへ屋 十字と雪とうへ 末史

一 海ことや 東洋乃うへ今姫君をむかへ給へり其
こちなれどもおかどきるこの屋なるへしまる
ぐとりてなし給へるすいぐと常なの地し
又ちまものまもてなしうしばれ給へる母まも
めのとふこもをくまし給へるすり海めやうに境尼
まろ人なれすまれぐしくてなれぐしきとも

一 うせにし 以海姫君此母此なまし為のゆかり地尼
志りがかなるあるまとかりおむ乃尼公まと盤乃尼
此妹今姫君乃母上也

一 ゆへくしまふく 母代りしたり東洋の上時く

母代を活ばんぞるに活んかりしたりしどもおまかり人
のんれこ海かなるハ尼知給まぬて母代やりてうへを
うしづ身給へるなるべし 母代よくせしハ何ごと
ぞしいぐさん也

一 ゆかり海うせ 姫君親其を云て為女屋連海也
屋上人なるどく氣會あるなるべし

一 君ハ と姫君ハあかるごれごとく也也しらひ
ありさ海なるど我母乳母世りあらハみせんとの
をとんのうちかりおりしめすやうしなる此母代なるどに
まうせられてとおもしきのふ也ちりながら人の
みるかりハおかどきておもしますも

一九月ゟ後しとの　縣召除目に未落居おほし書
ゟ後をんと　末代所縁なり　源氏風とりまにあり
一よろこびゆかり　中納言泰賀也　内又喜文へ
ちん大度へ見えて給へるにことゝいふもなくだゆしく
おがしめすも
一おほ義おほ以度へ乃以に今姫君此西對へもりまゐ
一かの后　中文也　と姫君法まゐ校也　中文の女屋
達をしあるくへと人へ〳〵ゆつるとも
一ひすどもの　几帳の紐どものよくかれとは　よくれ
くる後とひきうくひき　とゝかうゝなどの紐も
一いまやそくさやむ　うよめくをとのやむかとも

一やうく　のど海ゟ　しづまるも
一うしいうじて　さ文をもとゝ見えくある物ぐるりしやはる
乃度上人ハさ文りん合に出るとの文をて揚夫妃
れをとへりある紐し　源氏宮治まてりあり
一はこすれ　さ文乃紐也
一そこらいじく。いじらじと也　話に云ひしくと
居くるんも　俗にぴぷしと云
一そぐや　ちんを　ふ用也　君の給へくとてふぐる
をまゐべし
一物りくるふ君が　丸ハ姫ようとてそろくだし
里ふくく　逢にさぬのすそ紙とくへくるにさふれ

[illegible]也

一きふく　俗まことひ入ぬまでは喉がざめく也云
詞なるべし

一あのみまれ　あんぜ　不似わ也

一あをさえ　清入と云ふ後入と云ふなるべし

一こはいかに　おぢけられうる海の鳴れ人なまやわが
ことのまゝ代まらばかりなる海　琉球をうる海の鳴
と云也

一ゑくうら見奇

一まくせ　母代と云ふ　コラ君　源氏物語ニ王命婦と云ニ曰

一ゑうしハ君なし　さりやまきハ君なし　ハと云詞

筆誤歟

一いぢくなるん　これよりさ衣のんと

一いそやちゆゑ人　句人がこそよ夷人ハおりし
きもさ衣をさしての詞也

一かぎりまでを句わる夷人をちこれすさし出ぬ
がよりんと也

一さしがり　母代ヶ皆くをふくわくしてさし
よりまくや

一めづらしき　母代の詞しおぢしゑがへるをまぐ
然づらしきまくおりひさがへゐるとなるべし

一よし聖川奇　いりせとは兄弟乃事に用ると

さ夜とと唱夏法兄弟ちがくことくしそれだ
人ゑの絵なるゑとうめり
一きりたくせ　母ゆ如てこゝめる　舌利（きさとき）とせのど
かりく　老人（らうじん）口中（こうちう）れうるかひちくて　唯乾（きさど）せきこ
し絵しこる母代とせ
一うしむるり奇　人ぶのめちるとうしみ絵へる
り　淺（あさく）なるせし
一又あるなニ　志しせだやいすせれ山の中ゆ　おつる
よし此川乃源氏抱語にもなり
絵るちどおり　又神（ぶん）かおがけかるかりしにう
まし　さ法なりひとおりひ絵へるにものをあし

さ夜り母代乃奇にこゝめるもの絵へだ母代うちつ
らひとく　い海より法らん（けんざん）系をはとめ絵へわるきへ
ぐくおりひむきぶとし
一大（ゑ）りと事
一々ふは　中なぞん系かへ乃法もおまへりくせ
せしさせ絵へやうせ
一ひみちのまへりいつぐなれどうくごん文づかのらう
ことなれゆへとし
一あまれ　さ夜を見絵へといひつ　我もく
きぬをうげきて一ゆりまろひおへるにさ夜のど
かりし見入まへるせ

一うちそめ　今ひめ君は此夜しりのくるも
一知るねしたりあるが　人くのさうぐうりめ後さ夜
しかへるも
一あうちなく　奥もなれんもしたこにえそむきかれも
でさ衣と刀あわせ給へり　とれの女房衣よりも
かゝる事也
一かのせうと　今姫君一腹式アルの女乃法子と名乗
出し小将とそまにしよくあらりおとぐうりハふ孤
と也　同様りんも中将に似たるべし
一又の日屋乃法おのあくく　今姫君のるゆ出し
給へり

一うちくの　おとぐ乃法んとさ夜ハ法子ちがうこと
もづくしくおがしめすなるへし
一木丁此　おしうるしを念じ給へ後さ夜乃
法氣気をおとぐ法繰じてうちまとひておと
どおがしもなれまく姫君ちと此なきにも
とり出ぬをありつゝぬありさ夜とうめ事なへり
一あさましと　孫おきのうかを法らんじ事し
うにおとぐ此法むまゝめ名乗て又さほらへん
きいくゝ也
一いきや　おとぐの洞たるべし
一夜こと　龍鳥丼のるゆ　此逸異事おかし

まづらりしさのあれども志のぶ故なりけりなく物も
りなくもてとりけり也
一我さ何るまゝて　さ衣の法詞しあながちにも志
られしゞとおぼし絶されざて名殘もかくし給
給ぬとしいやし夷にも契きかりぬ心なる處
を拾おまくをとこのまるゝ心のなる夷と恨給へば
此別當の小弱とおもひ給へるもさ衣ゆゑ
としまゝ處也
一此そふ水リ俺ぬまぼ身殘う夷苦の祿殘なるゝ
てさそふ名あらだいなんとそ物りふ　又さそふ
名あらましかりと拾あられりなりひく

一せいすへき人なとあり　かゝる度にてハなしとも
一かまそめに　東へくゝるをやむべきにもあら
ざて又めでたき法ありさ處なるに叩かくさて
もめやさてうらんとしらまゝ也
一もまのうけせし　引斉　東勘
一かくいふなり　懷姓なるべし　東へ下の物ひ
とみるり　慈常あらりまゝかゝる度へなの
絶りしなへと乳母也
一なのむべき　さ衣をしん志けこのまゝにそ
ゆゑ君のんし
一君ぬ山路とハ物りひなぐら　懷姓をなのめか

さんとはおもひなぐらかゝまてもましていひ出
まゝにべきやうもなくて下れ日をかぞへて歎
給へり　古今　世のうき月ひとめ山路へいらんには
しかへしてかくしなりけれ　同年を見し
一此度乃
さ衣の乳母　大貳の乳母　武紀太輔　三年之間
道季　さ衣の御身ちかく居まひかへるし
常陸守　の名
一めもなくて　独伯也
一こゝかしらハ　龍鳥牡ノ君ハこゝへ給ひ乳母も

聞て付たるも
一こゝいふハ　おとはうげまさにて乃るや。かく事
ぞこは威儀師も　お遠也　公達とてもあらり
ならざれ　おもへりさてあげまへ下るとおどし
て此比中　なるべし
一いひをこせ　乳母のあたりへなるべし。いとしふさ
も使のんなるべしう
一寺　うげまさにてあるまじき事と　乳母
云しも
一かそこさんざち　やせ公達のかをめとハよかけ
ものと俗ぞいへる事也

一おとく　ほの字どうあり
一いでさち　料るどうげり道也
一はらくへの出そちりて姫君りハあげまへの出
たハさじまりぬ治懐姫ぞておそまく元母がいひ
あせなり
一うちまへんち　命をおしからざりしは治懐妊
男ゆへ身我ちがらいさりしく出ひちら紙へ通し
一形のかぶら　さ夜の思ひの紙へり。やうやう
さ夜の治得し　ひきちくうちらさせてをんかう
おうろかり紙や　わんとも
一あひてハ　さ夜の治奇りくれなし。ようちあれ

ふいくれをおもくハさんしとも
一ふるぶりまでは　部屋料奇とひろくれなし
一うし見舞へ　さ夜の洞世中九令ハあらくびとの
喜び紙治しもおもむしやうとくしくといひ
あそしてふのうちあかり用のまへり同さ度あがく
あかしかちら治名案ちし　文我男乃もあもた
どうれさでわらびさるていちるべし
一もあちく奇　部屋料より那かく情りあひ
て又務の夜中り　女の腹をまんなその奇也。
えのの思い料多也
一もあちく男もそ数のめ代世継を絵あ紀多也

見てもみよ。又此世紙をいりかみるべき浮志づ
こ沈る身水をとらつきそふともあるりいらん
のまぐりむや
一屋の　物忌乃ちまあるせらるに法夏笑てるも
抱忌りハよ和よりも物忌を入ずて又いぐしもせ
ぬ也物忌鬼の名も源氏にあるも
一いぬぞ　清懐姫をあがしめしおりせらるも
一おまとか川奇　んかくれあし　さ衣の奇也
一此久　海かちれど　久里ちりハ也奇だりし
一わくらちん　飛鳥井君奇し　名まさらハお
まのわくりもかりしんかりも

一うしこふは　尼成がはらくへの所乃車しらぬがふ
と云須ハいむとやこれを隠るとおもへり
一女君　むかしハ牛　据不残忌欲虚言を乳母
いふ也　威縁師りくる海かるべきものをちどいふ
一かくのこ　世中りしぬかりる身時ハ山林の栖
求とやかくまば文ばかへ人ちとも男紙もつ
やらや
一海とく　陳家に　駿河守がめ君　情お海と
みな虚言也
一此てもの　別当此かれ屋とさ衣の名案給へる
君は乳母と古知者といふや　なんでこう事か

あらん可(ちうぶき)所とし　お将度の返(かへ)ひまふとて
此法ハ云(ぶいん)者也
一あるときも　うげまさにおりて　めぬ(ぬ)くるる
也おがしめすや。　去用をいまずともと思ひ也
一ある両がくし　あれおそろしやと云ふるべし
懐姙ならぬ人さへ去用を巳(兄)ましとかなせり
一かのお将度と　さ衣を減りお将度とめの三風
おもふやさ衣れおかせ〻ゐくたゝんのとがふまあ
いぬとおもふがどにとかくおかをられぬや
一うくまてを　法延(たんじゆ)まもしあらばさりたおりひす
て給りしとや

の給ひちぎり　吳本ニ　出の為のもしへめのかゝが
るすや源氏の文へ法ゆへ不とありしかどさ衣などへ
見えんるすれをばかしさにんごもくして出(ぬ)さく
ざりし君今ハいよ〻と思ひ也。山ましと云本ニ
一いひくれ引　世中をかくいひくのをてくハいつ
不やいつ不ならんとをらん
一京のうち　京中ハ一夜斗不てハあらじ　井(井筒)続く
ちどいつく日かずへんとや
一美しの給ひ　お将度乃乳母の不ならぬいく
まじきとおかせらるゝや
一と紀を度　帥(そんの)中　納言度　尼云の兄(あう)也

一久しう　去周（とうしう）忌（いひ）給ふまじきなるを法令ま
かせ也　乳母は中るまハたかぐしかるじやも
一とかうおりし　法縦生まで　ハいきて　侍ハあや
しき女の勇なるがらもよく見なれんとおもふ
也　法らぬぞ　去周ハ忌（いひ）まかること思しかね度
法産れるまなどあつかひまゐべくもなれとし
一おもへば　異本（ありし）　女の苦（具イ）とハたかくしからぬとし
又異本あり　叱云　苦（くるし）し　具　如何
一かやう乃悪くちハ　おや（親）などのこし　法見おろ
そかなれば　まてらるくさし
一意こそ　未勘

一りくおりへ　いきにくさるを山ね度ゆへと乳母
もおりふし　かね度への名称おしさにはあらぐ
こりまつさ籠（こりし）まおり給へるとも　これ　海さおもり
ゆへまてそうく法　幸（さいたひ）もと又中也
一うしこハ　日紀（幸賀）ハ　法悪家にもよし　又とぶ　おり
下女にもなにがしそまがしへをしるとや
をくやも
一さまで　女君の詞　おすもしかる女君れ也
むかし物語なと志留くなるひ也さして侍の
物がたりとなし
一うきにじや奇　かくれなし　とうへる山の也

ちぎり給ひしものをいかゞめのとれ志なほぞと
おかしめす 御とも
一 心をしらぬ式アの大輔まそへて物國へとさはぐにしも
一 あらけさに 車 其て門 敲 叩こたくをさする紙 駿河
か屋のめ君は皮んあるといひなすや
一 あすか川を さ衣より 夏 中れ 翔 をくり給へる
哥のなりしにてくふの 葉 ひ 法 おしをいふ
とのん中し 拘う 幾 ひ さ衣へ 名 称 あるとん 家 が
ら おかしめすにもめのとれ物いふをたづり
さんあるがらうぞ 紙 ひ給へり
一 久しう 道 若 ちどくんにと中也

一 御ゆる後 呉 さ衣のとひ 家 に 爲 れ
一 あまのとを哥へ
へ とも也
一 あ 給 さ衣へ中し 紙 事 をあるべし
一 めのと又一人 女の同車
一 門ひ 事 いる 道 成が 取 るべし やなぐ 内 も
武官 奥 も
一 ひかさ志らぬ 蚊 を 火 の法 哥 二 条 まて 袖
ての時も
一 そくろかなる 書 くやかる 男 も 道 成も
一 大 武 屋 は の 國 爲 かひや

一中納言殿　さ衣の御宮し

一ぬきそく　さ衣の法氣色熱ハ地忌有雅鳥牛
へ法出ち我ゆるべし

一かうこやうれ　鳥名の法馬雅能とかして大武
殿法氣あるほどより江口のせう道ようちまで
きと　送荷とか也

一なかりのちらん　きびいしれ　検非遠使とかぶりもあるとに供
なとすると也　武官ちるべし

一めのとは　兵ゑわらひちなどさる也　お我おがり
川へたし里いらん也　思召ちがらさるとなきに
ゆらも也

一なかりし　少将殿かけめかて居り人ごとにも
おひなどまし人ハ絶ばくし給ひやハせん
おやしき方ちがらを又なくうしづ身なるんを
白とり取りしなせとし　殿のとなさ衣也は威光
ハ道成をもてえおなづらじちどくや也

一少将とハ　年は地下に奴されだ其年又かう
殿上して罪殿して義人ハ奴くのかれ殿
とゆんくゑさせんと也

一以後ハいかひなし　おひらかにかてなして。句。
志なぐしからぬやうにて也以後ハかひなし法
ゆりおかぬことなれを私取りしひく御すら

うにせぐさせ給へとて

一まことう　公達なるねだ女にふくまれぬとて

一おとこそ　めの子給さしてや詞し

一女君　あきこく心を乳母おくこ内身荒神と云

中の儀給なす神と云云此神乃女君給ひ

たるこぬとて

一おとこぐさり　此の子給さしていふとうくまで

ふう身法ふなるんとハ物もハざりしぴどしうく

までふう身ことはなりなく　めの乳母とともにかれぬう

やいとおやしくしふ神とも

一うまたで　枝子より　餞乃扇　菓物などとつまいで

ひすかや

一女の作うそく　さ衣の誰やらんあてもとおか

せくまうく　振所也　女君此源ぬまうるに

めしかへさせなへといふや

一此法扇　あたらしきうつやとうる法句

同をつくし身人もやとおしませ給ひたるを

なれたるとハ古くらんや

一出来法らんぜよ　菓人さ衣此法筆をハ一字も

みたがるとや

一海ことり　我ひしおなじものすやと扇し

なれどうなの見えんかと外給へり

一我君をまゐて　さ衣をまゐり　尼姫をしくこと
一あ綫ぶ道　あをざ　まゐ侍るといふりおなし
一あるへて　ひうまぬんと　源氏りあり
一むかりて　ちらぶちて　頃さるあるにみまげさ
一夜さ衣乃　持給へるあふぎ也
一まゐられ　表　草字ゆゑ　引奇ゆゑれと綫
わるる　家人　かぢをあまひ　乗をしらぬあひ　[illegible]
我　まゐ打ハさぐ　何となく　申給へるにいはよく
何合るゆゑ也
一かぢ綫こえ奇　龍鳥井君の　身綫しつめん
と云ふ也

一そへて　[illegible]奇
あふぎの風り　波乃立　海ゑ身をあぐ　[illegible]んとも
一ちまと　[illegible]ひ　[illegible]ぐ　[illegible]ハまゐ　[illegible]ぐ　[illegible]ん　[illegible]
我ちまゐらなもいるゝ也
一けさハ又　[illegible]　[illegible]の使をハ何といひて
[illegible]　龍鳥川の奇　此時まで　[illegible]
[illegible]　[illegible]
一海まてハ　[illegible]ひやハ入しや　龍鳥君の奇也
一心　[illegible]　[illegible]
ハ懐妊乃　[illegible]　又うちうへしとハ　[illegible]
[illegible]

一あさて はしたなれど居おちられて 徳家
乱のたぬみと思ひて なるべし
一童まはしくへもつみきなりし 自然しもりんと
一男も 右わのさしんきも あはしぬさんも可也
あまのりけがされりあやまりくとも 徳也いのち
もあるしくまんゆるやと
一おもひ侘て 自の身どもおもかり 淵おぬとハ思
つめどまいあしくぬんのいとぐ成されバ けんてとゆ
し 後へ人の ちつ流はんくるしきとも
一ぐ小清への ふべ成さ侮されて 懐姫の君 あきな
いとはいつかやさとも

一こよりハ さ衣のゆめにしお倒しさにゆくへつらうし
ぬるなり
一清らかの 小舎といふ人の寛得とす也 小式部か
後とも見えず
一これや 小式部の内侍ハ去りまんかと也
一とちあまれ 瀧部みもふし宿りしもとさ衣へ中 とて
一いつゆとめのとぐ 供乃さぶもろうひ也とけりし
のんゆりゆきくろぶくものくほりしんし
いうしくともわつんとさやうゆはあしき見ゆ
鏡ハ今まてでさ衣れ吹所とや
一あまて八倒せ あは河乃むさのみるの上宮のあり

一下葉　源氏の女の下葉し
一志紀あへの奇　くれなゐしさ衣也
一かの夢　懐姫のちゐも　誕生ありていりやうちゐ
下ぶてあひ出ことんとおりしめすも　なれがお
まわが法るをまぐりのみしてちるべし
一うらんのうけも　さ衣りゐるべきや
一あふしり　さ衣れ法子かゐはなされじと
志ゐて志白なせとも法誕生ならずせむほ
かくこうべし　来ぬまちときこうしめしけらばふ也
一奇　そのちらと　母の姫をやまぎ出んとのさ衣

れ法奇・たくまに母をもこせそのちらを
腹の字紙含めり姫也やハ法誕生ならしたこと
一法師より　菊子ゐり人の見るゐるべし
一んの法さ也　おりひ乃つまと心同し
一夕暮　雲のおりゐ定こる紙法読じけるも
一鶴の山は　秋乃ゐくも
一奇　せく袖り　さ衣奇しさ衣のちみこゐて積ど
を深くるゐとし
一夕暮れ　んの法まれ詞ようちるべし
一此世の　菊子ゐるめ也
一又を　源風書面天　朗詠　のと記されもるまに

秋まさんと女一名乃常懸れ其味ハ秋や刀ゆゑ
んとよめ傳奇ふしや。志づゝ[呆]たてん也奇
れ詞也
一加の舟　唐泊からぐ傳りや今ハ枝名ゆゑ人也よ
ら寸白ゆゑ也はかぬとも　[アレ]籠[ヒ]ゑへ下る人ハ[ヨ]昇平
一此大夫　道成し　お絵りの関ハ右の屋ごとく
なるへし
一大武の毎ハ　よ紀女乃あるに大夫心をかくるも
一よひるまで　大夫刀ゑ女を女若ハ[ヒ]鎌しと
ゆゑ乳母ハ一名のんごたさハ　大武の女屋ハ
ん線かゝると[たゞ]後立也

一とさ海かう出家ハ　女一名男線んつくせこめ
まふと云也かゝ傳ごとく　懷妊中ハ物おもひ志つ
ゝ給ふ事[ゆゑ]見ちるひなるべし法事命なるゝ
おりふ人ハ又おひ給ひんやうや也
一いてある　先のと大方ゆしてをかずしてかく
うきめ線刀ゑ傳とおしめ給ひうち海かせて
をかざるやうも
一うちむけかりて　乳母　後立して立けるゆゑ
一むしあぎの巴とへ　こゝぐ傳りゆてちるべし
[ひ]海[ぎん]お名不[ゆ]欲
一あかれてもおふ断やあるせ男線なぎんとも